

## 《2008年4月例会報告》

【日時】2008年4月23日(水)19:00~21:00(その後「ルン」~2:00)

【会場】筑波大学附属高校3F会議室(東京都文京区大塚1-9-1)

【テーマ】DUOリーグのトロフィーをアート感覚で

- サッカーシューズからトロフィーを作る?! -

【報告者】中塚義実(DUOリーグチェアマン)、土谷享(KOSUGE1-16)、佐藤一郎(靴郎堂本店)

【参加者(会員)】安藤裕一(筑波大学ハンドボール部OB)、牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)、白井久明(弁護士)、高橋誠(東京都サッカー協会フットサル運営部)、土谷享(KOSUGE1-16)、中塚義実(筑波大学附属高校/DUOリーグ・チェアマン)、室田真人(NPO法人九曜クラブ/中央大学大学院)、依藤正次(ヨココム)

【参加者(未会員)】国島栄市(ビバ!サッカー研究会)、佐藤一郎(靴郎堂本店/靴アーティスト/靴創家)、塩谷良太(筑波大学附属高校非常勤講師・工芸)、保持壮太郎(電通/筑波大学附属高校サッカー部OB)

【ルンからの参加】中村敬(ロジウラー/元DUOリーガー)、武藤太智(A.C.アンマリアトーレ/元DUOリーガー)

【報告書作成者】室田真人

\*\*\*\*\*

## DUOリーグのトロフィーをアート感覚で

- サッカーシューズからトロフィーを作る!?! -

報告者：中塚義実、土谷享、佐藤一郎

\*\*\*\*\*

### [目次]

はじめに

第1部 DUOリーグのあゆみと本プロジェクトの意義(中塚義実)

1. DUOリーグのはじまりとその理念

2. DUOリーグのあゆみ

3. DUOリーグの現状と本プロジェクトの意義

第2部「DUOリーグのトロフィーがない!」プロジェクト(土谷享&佐藤一郎)

0. 佐藤一郎さんの自己紹介兼プロジェクト参加のきっかけ

1. 「DUOリーグのトロフィーがない!」とは

2. 土谷さんが本プロジェクトにかかわるようになったきっかけ

3. プロジェクトの実践: その1(スライドを見ながら)

4. 革の話

5. プロジェクトの実践: その2(ビデオ映像を見ながら)

## 6. 余った部品の利用法

### 第3部 質疑応答・ディスカッション

1. 今後の展開と切り口を考える
2. 靴磨き・ばらし講習会の様子
3. トロフィーの仕上がりイメージ
4. トロフィーの位置づけと制作上の課題
5. いかに広めるか
6. サンドルの価値と値段

おわりに

## はじめに（報告者：中塚義実）

本日のテーマは「DUO リーグのトロフィーをアート感覚で」ということで、サッカーシューズからトロフィーを作るというプロジェクトの概要がメインテーマとなってきます。

まず今日の進行ですが、第1部としてDUO リーグの概略を振り返ります。「DUO リーグっていったい何？」というところが理解されないと、このプロジェクトの本当のよさがみえてこないと思うので、そのあたりを質疑応答も含めて30分程度、私のほうから話をさせていただきます。第2部では「トロフィーがない！」プロジェクトの実際を、映像を交えて土谷さんと佐藤さんに紹介していただき、最後にディスカッションと考えています。

## 第1部 DUO リーグのあゆみと本プロジェクトの意義（中塚義実）

### 1. DUO リーグのはじまりとその理念

緑色の冊子（『平成20年度前期（第25回）DUO リーグプログラム』）とピンク色の冊子（『DUO リーグ10周年記念誌』）、および青の冊子（『地区トップリーグU-18東京2008プログラム』）を見ながら進めていきたいと思います。

#### 1) サッカー医・科学研究会でのユース年代改革案の提示（1996年2月11日）

ピンクの冊子の8ページを開いてください。細かな経緯は省略しますが、1996年2月11日のサッカー医・科学研究会シンポジウムで、短い時間でしたが、私がある時点で考えていた「ユース年代改革案」を発表しました。そのときの資料がここにあるもので、これが出発点となっています。

96年は、Jリーグ誕生に伴う一時期のバブル状態がはじけた頃でした。私自身、サッカー界を何とかしたい、もう少し工夫しないと駄目になると感じていました。特に高校生や中学生のユース年代を根本的に見直さないと、よくなってはいかないぞと思い、当時考えていたことをまとめてみたものです。簡単にみていきます。

まず「1. 登録制度改革と、現行の大会の整理整頓」。これは必須です。

次の「2. リーグ戦を中心にした組織づくり」が、DUO リーグにつながっていきます。ご存じのように、高体連の大会は、全国大会がインターハイとお正月の選手権、それから関東大会などの地域大会の3つです。それぞれがノックアウト方式で予選が行われ、弱いところは年に3回しか公式戦がありません。しかも補欠だらけ。これを何とかしなければいけないということで、レベル別にリーグを組織し、ひとつのクラブから複数のチームが出られるという構想をこのとき描きました。図4は「リ

リーグ戦をベースに考えた1年間の大会の流れ」ですが、リーグ期間がシーズンになるので、ユース年代にシーズン制という考え方を導入するのも好都合だと考えました。

あわせて「3.トレセン制度の充実」ということも構想の中にありました。リーグ単位でトレセンをやれば、似たようなレベルで集まって切磋琢磨でき、似たもの同士の仲間ができていいんじゃないかとの考えです。

このほか、「4.指導者の育成」ですとか、「5.サッカーをこの国に根付かせるために」組織されていないサッカー人口を大切にしようということなどをこのときに構想として持ち、発表しました。

## 2) 東京都ユースサッカーリーグ構想(2月23日)

9ページには、1996年2月23日付の「東京都ユースリーグ構想(案)」を載せました。サッカー医・科学研究会で発表した数週間後には、こういう構想になっていました。もちろんその前から考えていたことですが、10チームくらいでリーグを組織して、週末にリーグ戦をやると考えたときに、学校の1学期とか2学期の間に済ませることができるとかどうかとシミュレーションをしたところ、高体連の試合の合間でも十分できるということがわかりました。リーグ戦の試合日を9節くらい取って予備日を設けるくらいできるので、10チームのリーグ戦は可能だということです。

ただし、学校行事についてはあまり考慮していません。例えば、中間テストや期末テストの前は部活動が禁止で試合ができないとすると、各学校のスケジュールが違うので9節も確保できなくなるでしょう。また、顧問の先生しか付き添いとして認められないとすると、BチームやCチームの参加は困難になるでしょう。

しかし、このリーグは学校のために行うのではなく、スポーツのため、プレーヤーのために行うものです。趣旨に賛同する“クラブ”が加盟し、“チーム”を編成して参加します。加盟クラブは学校の場合もあればクラブユースもあり、リーグとしては、各チームに責任能力のある成人が付き添っていればよいと考えます。つまり、“歯磨き感覚”“補欠ゼロ”“引退なし”のスポーツライフを、周囲の大人が関わりながら、リーグ単位で作っていきましようということです。結果的にリーグ戦を通して“クラブ”が育つことを意図しています。もちろん学校を基盤とするクラブも含めてです。

“歯磨き感覚”とは、顔を洗ったり歯を磨いたりする感覚で、勉強もスポーツも、日常生活の一部として取り組みましようということです。試験前に急に勉強を始めるのではなく、また大会前に急に練習量を増やすのでもない。普段から両方やりましようということです。それが真の意味で生徒・プレーヤーのためになるのだということであり、そのことを実現するためのリーグシステム導入なのです。

## 3) 東京都ユースサッカーリーグ計画(3月)とDUOリーグ開幕(4月)

10ページ、1996年3月23日付の文書では、構想が具体的な計画になっています。この時点で、参加チームが確定しています。筑波Aや筑波B、あるいは小石川A・B、昭和A・B・Cというのは、1つのクラブから複数チームを出しているということです。一番盛り上がるのはAとBのダービーマッチです。このとき、筑波大附高はAチームを3年生中心で、Bチームを1、2年生中心で編成し、高体連の大会には、AとBの連合軍がナショナルチームを編成して、より強くなって出るという形をとりました。全然強くならなかったですけど(笑)。

11ページのところに、リーグ第1節記録、第2節記録がありますが、このような「通信」を毎回作って発送していました。情報を共有することはとても大切です。当時はFAXで送っていました。もしFAXがなく、いちいち切手を貼って郵送していたのでは、長続きしなかったかもしれません。FAXで、ボタン一つで送信できたので、だいぶ楽でした。

DUOリーグ第2節の記録の欄外に<リーグ戦情報>とあり、「本リーグの名称を検討していた指導者委員会(?)が、第2節終了後に巣鴨駅前某店内で行われ、DUO(デュオ)リーグに決定しました」とあります。何のことはない、飲み会をやりながら決まったということです。

しかし結果論ですが、この名称はすごくいいなと感じています。ピンク色の冊子のあいさつ文に、「DUOの意味」と書かれた一文があるのでご覧ください。DUOにはまず「二重奏」という意味があります。本当は高体連の2地区だからDUOと言っていただけなのですが、英和辞典で調べてみると、二重奏という意味が出てきます。これは、地域と学校の二重奏だし、トップレベルと底辺の二重奏だし、顧問と保護者、在校生と卒業生の二重奏でもあります。また、西ドイツのスポーツ振興政策であった「第二の道」を連想させるような言葉でもあります。DUOというネーミングは、結果論ではありますが、よかったのではないのでしょうか。ちなみに名付け親は上野二三一氏（後述）です。

## 2. DUOリーグのあゆみ

ここからは緑色の冊子の4~5ページをご覧ください。その後の歩みについてです。

### 1) 小さく立ち上げ大きく育てる - リーグ創設期の頃

96年に、6クラブ10チームで始まりました。高体連だけでなく三菱養和というクラブも参加しています。ちなみにこのときの三菱養和には、いま浦和レッズで活躍している永井雄一郎君が属していました。彼もDUOリーグの試合をここ（筑波大学附属高校）で経験しました。

小さく立ち上げ大きく育てるという方針でやっていました。後期リーグからどんどん仲間が増えていきますが、この大会を長く続けるために参加費を徴収することや、中3が秋口から活動の場がなくなるので、文京区の中3選抜が後期リーグだけ参加するようになったこと、あるいはアトランタオリンピックにヒントを得て、特別枠選手として19歳以上の参加を3名まで可としたことなどは、いずれも初年度の後期からです。これによって浪人生の活動の場ができました（笑）。

97年度は、日本サッカー協会の機関誌で「ユース年代のサッカーはいま！」という連載を持ち、その中でDUOリーグの試みを全国に紹介することができました。結構反響がありました。そのとき示したイメージ図が、配布資料にあるものです。底辺は近場で、強くなったら広いエリアを行き来するリーグ環境（「衛星型サッカー環境」）を作ること、レベル別のリーグが学校の1学期と2学期にあり、3学期はオフシーズンであり翌年のプレシーズンであるという「シーズン制」を確立すること、シーズンの合間にはフットサルのイベントなどが入ってくるような、年間のスケジュールを構築することなどがアイデアにありました。そしてこうした仕組みを、将来的には他のスポーツにも広げ、例えばサッカータレントのA君は、レベルにあったサッカー環境で年中サッカーをすることができるし、スポーツ好きのB君は、春のシーズンはバスケットをやって、秋はサッカーをやるという「マルチスポーツライフ」が可能になるようにしたい。こういうことを視野に入れていました。

### 2) 横と縦への広がり - 東京都ユースリーグ創設の経緯

DUOリーグ内を整備しながら、同時にこの活動を外向けに発信する取り組みを続けました。2000年度には、「2001年から東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」をスローガンに掲げ、まずはリーグ戦プログラムを作りました。これは、DUOのメンバーが手にすることができる、メンバーとしての証です。このほかいろんな整備を進めながら2001年、2002年、2003年と準備を進め、東京都全体での公認リーグ化に向かっていましたが、そこで学校教育との折り合いが付かず、公認リーグとしての動きがいったんストップしました。それが2004年のことです。

公認リーグ化が一時ストップしたとは言え、DUOリーグはもちろん続き、DUOリーグをモデルとするリーグが、都内の8つの地区で育ちはじめていました。

2005年度はDUOリーグ10周年です。その頃は、DUOリーグ創設当初に都立小石川高校におられた上野二三一氏が、日本サッカー協会のユース年代の改革のリーダーとして、ユース年代のリーグ戦を整備していく動きをされていました。そして「プリンスリーグ」という全国9地域単位のリーグ戦が誕生し、プリンスリーグにつながる都道府県リーグが2005年、2006年あたりですいぶん整備さ

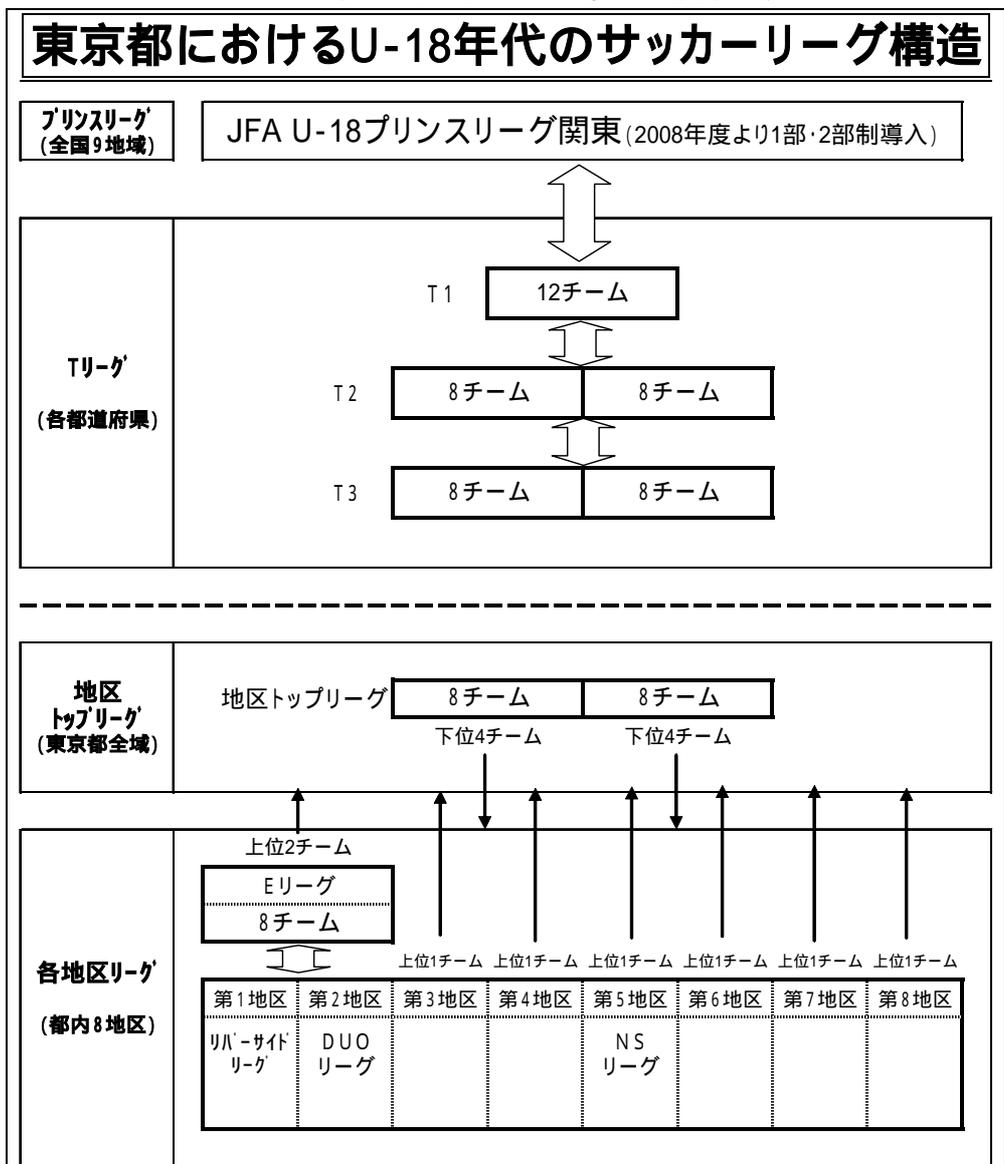
れてきました。

私たちが底辺から積み上げていたリーグ環境の公認化は、2004年度にはうまくいかなかったのですが、2005年度には「Tリーグ」という、東京都サッカー協会公認リーグができます。いま、T1、T2、T3と、プリンスリーグにつながるリーグが上から順にできています。このような形で2006年、2007年と進んでいきます。

### 3. DUOリーグの現状と本プロジェクトの意義

#### 1) 「地区トップリーグ U-18 東京」の誕生と現在の状況

青の冊子(『地区トップリーグ U-18 東京 2008 プログラム』)をご覧ください。まず表紙に1~8の数字が振ってあります。これが東京都高体連サッカー部の地区割りです。DUOリーグは、高体連の第2地区で行われているリーグです。足立区、豊島区、文京区あたりです。DUOリーグをモデルとしたリーグが、高体連の地区割りごとに展開されています。これら地区リーグの上位が集まって、今年度から「地区トップリーグ」というのを組織しました。この冊子は、そのプログラムです。



3 ページをご覧ください。いまの話を図にするとこうなります。頂点にあるのがプリンスリーグ関東で、その下に T1 が 12 チーム、T2 が 16 チーム、T3 も 16 チームです。このような形でオフィシャルリーグが整備されています。その下に大きな点線があって、Tリーグとはつながっていないのですが、底辺からの DUO リーグ、その上の E リーグ (East リーグ)、さらにその上には地区トップリー

グが 2008 年度から整備され、底辺から東京都全域にわたるところまで、リーグがつながりました。

この冊子には、地区トップリーグとは何かについてだけでなく、10 ページ以降には各地区リーグの概要が紹介されています。あとはリーグ戦プログラムとして、メンバー表などが載っています。トップリーグに関わる全てのプレーヤーと各地区の加盟クラブに行き渡るようにしています。

これが DUO リーグを取り巻く現在の状況です。

4 月から今年度の DUO の 1 部、2 部、それと E リーグが始まっています。筑波大附属高校はいま、E リーグに属しており、2 勝 1 敗です。月に 2 回くらい DUO リーグ通信を発行し、またホームページ上で試合結果を報告しています。

## 2)「DUO リーグのトロフィーがない」プロジェクト誕生の経緯

DUO リーグ通信の 4 ページ「トロフィーがない、カレンダーはある」と、5 ページの「トロフィーがない、だから今週は靴磨きと靴解体」という記事があります。このあたりから土谷さんと佐藤さんの話になってきます。

DUO リーグでは、優勝チーム持ち回りのトロフィーがありました。ところが、定かではないのですが、リーグが始まって 7 年くらい経過したところで、持ち回りトロフィーがなくなったことに気付きました。その間も優勝チームにはミニチュア版のレプリカを渡していたので、誰も不自由を感じておらず、「なくなった」ことに気づくのが遅れたようです。でも、トロフィーがないっていうのは、全国的に有名な DUO リーグとしてあまりにも情けない、けど間抜けで面白いね、という話が DUO の中から出てきて、新たなトロフィーを作ることになりました。

作るにあたっては、既存のトロフィーを注文するのみの手だけど、せっかくサロン 2002 の仲間に KOSUGE1-16 の土谷さんがいらっしゃるので相談してみようと思い、連絡したのが去年の夏頃です。土谷さんの方から、参加型でできないだろうかと逆にご提案いただき、その後いろいろと話が展開し、最終的に、サッカーシューズからトロフィーを作ろうという話につながっていきました。

では、土谷さんお願いします。

## 第 2 部 「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクト

(土谷享 & 佐藤一朗)

### 0 . 佐藤一朗さんの自己紹介兼プロジェクト参加のきっかけ

靴郎堂本店の佐藤一朗です。KOSUGE1-16 のアトリエがありまして、いま、そこを一緒にシェアしているということがきっかけで、このプロジェクトに参加するようになりました。もともと何年か前にお会いしていて、ずっとつながっていたアーティスト仲間だったんですけど、ある日ふと DUO リーグの打ち合わせがあるということで、ぼくも参加し、いろいろ話をしているうちに靴を解体してトロフィーにしようじゃないかと話になりました。

もともとぼくは靴を仕事にしていまして、それを使ったアーティストでもあり、いま専門学校で教えています。「トロフィーがない」の話があって、いまはぼくと土谷さんと、DUO リーグの試合後や普段の練習にお邪魔して、いろんな学校をまわりながら、靴磨きをして、いらなくなった靴を解体するという講習会をやっています。

### 1 .「DUO リーグのトロフィーがない！」とは

土谷：では、第 2 部ということで始めさせていただきます。「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクトの説明をしたいと思います。

さきほど佐藤一朗さんからざっくりと話があったとおり、当初去年の7月末くらいに中塚さんから急にメールをいただきました。この話はすごくおもしろくなりそうだなっていう予感がしました。ただ最初は、トロフィーがどのくらいの値段で作れるのか、とか夏の終わりくらいまでに納品は可能かという、かなり具体的な話だったんです。でも、ちょっと待ってもっとおもしろくしましょよ、ということでしばらく保留にしてもらって、そこから何となくお互いにイメージを温めながら、実際にいろいろと動き始めたのは11月末くらいからでした。

はじめは靴で何かを作るというイメージは全くありませんでした。ただ、DUO リーグの900人くらいいる高校生の力を、トロフィーを作るプロセスの中に入れていきたいというイメージがありました。どのようにトロフィーに高校生たちを参加させていくかということで、はじめの頃は陶芸で作ろうと思っていました。アトリエが一緒の陶芸作家チームと何か一緒にできないかなということで、12月末にうちのアトリエで、DUO リーグの先生方、監督の方を呼んで、トヨタカップの時に鍋兼打ち合わせをやることになりました。お酒を飲みながら、トヨタカップも見ながら、緩やかに話ができればと考えていたのですが、一向に陶芸家のアーティストが現れず、そこに入れ替わって佐藤一朗さんが登場し、そしたら佐藤一朗さんの熱いトークが始まりました。佐藤さんが靴を作るようになったきっかけ自体が、非常に興味深いです。

佐藤：小学校の時からサッカーをやっていて、ただサッカー選手を目指すのがだいたい普通の夢だと思うのですが、ぼくはサッカースパイクの磨きをよくやっていました。もともとぼくはものを作るのが好きで、靴っていうのはこんなふうにできているんだというところを勉強して、靴磨きをやった靴の道に進んでいきました。サッカーをやっていたら、サッカー選手ではなくて、サッカーシューズを作りたいという方向に行って、現在の仕事のきっかけになりました。

年末の鍋のときにこの話をしたことがきっかけで、このような話になりました。

土谷：DUO リーグの参加の仕方はプレーだけじゃないぞと。靴を磨くことから、おそらくサッカーの環境から発生して将来のビジョンもできてくるのではないかと。もともとDUO リーグの掲げる理念の中に、日常的にスポーツを展開していくようなビジョンとか環境づくり、「歯磨き感覚」という言葉が象徴的だと思うんですけど、まさにその実践の中から佐藤さんの今の仕事があるんだなということにすごく感銘して、じゃあ「靴磨き」をきっかけにトロフィーは作れないかという話になりました。

毎年高校生たちは、2足から3足のシューズを履きつぶしているという話が挙がって、そうすると900人いるから2,500足以上はゴミとして出ているのかと。それはもったいねと。そういう履きつぶされたシューズをもう一度、スポーツ選手として、人だけでなく、物もリスpektしてもらって、まずそれを磨く練習に使い、その磨いた靴を解体して、そこから取った皮でトロフィーを作ろうというビジョンまで急に飛躍しました。

グラウンドの想いの蓄積が、サッカーシューズの傷だったり穴だったりすると思うんですね。そういうものが、全員のトロフィーになるというのは夢のある話なんじゃないかと思いました。

これはおもしろいということになり、陶芸の話はどこかに飛んでいってしまいました。12月から、「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクトとして、サッカーシューズを使ったトロフィーを作りますということで、DUO リーガーたちにも告知を始めました。

## 2. 土谷さんが本プロジェクトにかかわるようになったきっかけ

土谷：そういうふうに関わり始めたのですが、ぼく自身は中塚さんの活動に前から興味がありました。ぼくが初めて個展をやったときにも、中塚さんにトークで来てもらったりしました。なぜ興味があるかというと、美術の分野も、アスリートに特化したようなシステムになっていると思うんですね。美術でアスリートというのはおかしいですけど、技術的に優れているのかは分からないんですけど、癒着体質というか。そうではなく、日常的にもっとアートというものは実践可能ではないかという

ことで、ぼくは美術館とかギャラリーを選ばずに、街の中とか家の中とかで発表してきました。

そのように実践している中で、よく手伝ってくれるスタッフがいて、彼が両国のサッカークラブのコーチをしていました。彼ととことん話をしてみたら、スポーツのクラブ環境も、ぼくら KOSUGE1-16 がやっている違和感と通じていると。要するに、ローカルなクラブチームですら、トップを目指していくような踏み台にしかなくて、地域のクラブでも街の人が支えるような実践の場が作れていないというようです。

ぼく自身もアートにこだわる必要もないと考えていたので、サッカーとかスポーツの環境とか、そういったものとアートの実践を何かシンクロさせながら作品を作ったり発表したりできないかなと思っていたのがちょうど 2003 年くらいです。

そんな中で中塚さんと出会ったわけなんです。それで DUO リーグと去年から関わるようになって見えてきたのが、体育会系っぽいんですね。リーグとかクラブとかに参加させるシンボルというか、場とか環境とか、それからイメージとかを作るというところで、アートとかデザインの力は十分に活かせるんじゃないかなと思い始めました。

DUO リーグ自体はシンボルマークを持っていないくて、ただ 12 年も活動していますし、その歴史、オルタナティブな独自の活動なのに続いている芯の太さもありませんし、いま一度 DUO リーグのデザインみたいなところを、ぼくらにタッチさせてください、と中塚さんに話したらすごくおもしろがってくれました。「そうだ、そうだ。カレンダーを作りたかったんだ。」ということで、まず DUO リーグがトロフィーをなくしてしまったというキャンペーンの一環としてカレンダーを作り、シンボルのロゴマークを作り、それでトロフィーを作るという三段ロケットのような形で発射させてみましょうということで、今年に入っているいろいろな試みを行ってきました。

### 3 . プロジェクトの実践：その 1 (スライドを見ながら)

土谷：これはぼくが作った DUO リーグのロゴデザインです。たぶんスポーツ関係の人からすると、

アートとデザインってすごく近いものと感じているかもしれませんが、結構遠くて、ぼく自身これまで人のものをデザインする機会がなかなかありませんでした。でも、サロン 2002 のロゴも前にデザインさせてもらって、そういうのも嫌いではないので、じゃあ歯磨き感覚のスポーツライフっていうのをどうやって形にしようかなと思い、とりあえず歯ブラシの上にデュオリーグを



乗っけてみました。そしたらおもしろいビジュアルになって、これはこれまでのサッカーのエンブレムっぽくないぞ、サッカーっぽくないぞと。そもそもローカルリーグのエンブレムがサッカーっぽい必要もないと思って、これを提案してみたらそのままそれが通ったような感じです。

本当はこれを引き継いだ「トロフィーがない！」プロジェクト を作りたかったんですけど、こっちの方が先行してしまったんで、DUO のトロフィーがないということで、わかりやすく打ち出せばいいのかなと思って、いろいろ使えるようなものを作ってみました。



土谷：もう一つ並行して DUO リーグのための靴磨き講座もスタートしました。

これは 2 月の下旬、DUO リーグイベントデーのときですね。本郷高校の食堂を使って、そのときは総勢 40 名ほど集まっていたいて、すごく和やかムードで靴磨き講座が始まりました。

佐藤：実はこのような恰好で私は展覧会をやっているんですよ。そのつながりで一緒に紅白幕も。

土谷：何でこのシチュエーションなのか説明してよ



佐藤：靴というものをずっと追求していくと、明治維新から日本に伝わってきたんですよ。それで、日本人というのは靴というものが全く分からないわけですよ。だから、全く違うそこから生まれていく、何か違うジャンルの靴がいいということで、ぼくは「履けない靴」といっているのですが、手前の写真のやつのことです。あの小さい靴は、10本の指だけで履くというような靴とか、あの向こうの半球みたいなものも指先が出てしまうという靴だとか。

やはりぼくは明治維新から来た、時代を感じさせるようなレトロな恰好で作品を発表させていこうと思ったのがきっかけで、それに続いて紅白幕を張る事にしました。目立たせるというのもあるんですけど、自分が目立つ事でコミュニケーションをとり、靴の作品を履いてもらう。そのコミュニケーションもぼくの作品の一部だと思っているので、土谷さんと話をしまして、こういった恰好で行った方がいいということになり、みんなに注目してもらう形でやっています。

その紅白幕がグラウンドに出たり、あちこち出張して靴磨き講座をやっているの、張る場所も毎回毎回おもしろいなど。最初



は食堂。グラウンドのときもありますよね。

土谷：それで、まず靴を磨いて、次にその靴をばらしていくんです。ただ、近頃の靴は皮の部分が少なくて、使い捨てみたいな感覚で、学生たちも磨く習慣がなかったりするらしいです。本当に履きつぶした靴を学生たちが互いに磨くと、きれいになっていくじゃないですか。そうしたらばらすのがもったいなくなっちゃうんですね。「もう一回履けるよ」「それ磨いたら俺にくれよ」とかいろいろトレードが始まったりするんです。何というか、物の見方だけでその価値が違ってくるなということ、やはり物作りの視点から教えていくことは大切なのかなと、いま思っているところです。そういえば、一朗さんは全然靴を履いてこないんですよ。

佐藤：昔の日本人は靴を知らなかったということで。当時の日本人は草履や雪駄や下駄などを履いていたので、当時の設定を想定して、ぼくは靴を履かない格好になっています。

土谷：佐藤さんが明治維新の話をしていましたけど、ぼく自身もアートの実践の中で明治維新がすごく重要な転換点だと思っています。やはりアートが文化として入ってきたんじゃなく、技術として美術が入ってきた経緯があります。未だに教育の現場

でもアートの実践の場であっても、日本においては技術主導の時代が続いています。だから日本から新しいアートが出てこないということもあります。

本来ならばアートというのは、自分たちで場も作り、環境も作り、仲間も作り、そこから生まれてくるエネルギーが作品になっていくようなものなんです。そういったものが日本には全くない。教育の現場にもなく、そこにすごく違和感があります。これに最近気がつきました。たぶん体育もそんな感じだと思うんです。やはり日本人の身体の矯正とか、ナンバ歩きから軍隊形式の整列ができるように矯正させられる一つの技術として体育とか運動とかが入ってきた経緯があると思うんです。

やっぱり今もそれは引きずっていて、たぶん美術の方にいると体育嫌いの人がいて、体育の方にいると美術や音楽嫌いの人が多いと思うんですけど、本来ならば一緒に遊びとしてのジャンルだと思います。そういったところで、お互いどんどん越境していけるような試みがこれからどんどん必要になってくるのではないかと思っているところです。



そのきっかけの一つが「DUO リーグのトロフィーがない！」キャンペーンになってくれればいいかなと思っています。

最終的なトロフィーのイメージとして、佐藤さんに資料を集めてもらいました。

佐藤：これはネットで検索して出てきた、昔のサッカーシューズの写真です。たぶんヨーロッパの方のもので、ヨーロッパにはおそらく靴の技術があって、日本ではこのような靴は履いていなかったんだろうなというものです。古いサッカーシューズです。



#### 4 . 革の話

土谷：やっぱりこういう靴でも、皮でできているのかな。たぶん佐藤さんが、みんなの靴磨きをして、ばらして、トロフィーを作るということになった経緯の一番コアな部分に、革産業の話があったと思うんですよ。

佐藤：革の産業はかなり衰退しています。昔は、そこに部落差別もあったけど、皮は副産物で、人間が食べて余った皮がもったいないから、どうしようか…。じゃあ、靴などにしようとなったのが革の経緯です。

日本では今日のように牛の皮が主ではなかったんです。イノシシとか鹿を食べてその皮を、武器にしたり、洋服にしたりとしていました。牛が主に入ったのは明治維新頃で、新撰組がすき焼きを食べたとか、そういうのが有名な話です。すき焼きが入ってきたのもその頃です。牛を沢山食べるようになったため、現代ではほとんど牛皮が主流で、牛皮はほとんど輸入になっています。日本で、国産で取れる皮を地生というのですが、地生はもちろん松阪牛であったり、霜降りの肉の皮を使ったりします。

革というのは丈夫で、しかも足のフォルムの形になっていくので、足に馴染んでいくのに適した素材です。いまは合成皮革とか人工皮革というのを聞いたことがあると思いますが、合成皮革というのは織物のようなものです。織物に樹脂を乗せたものです。人工皮革は、織物ではないのですが、不織布みたいなもので、皮の繊維というのは非常に複雑で口で説明するのは難しいのです。人間では作り得ないものなのですが、それに近くしたのが人工皮革です。

その2つというのは、足に沿うようなこともないし、その形にもならないし、皆さんが履いているような人工皮革のスパイクを履いていると、逆に足を変形させてしまう原因になっていたことがあります。なぜプロの人たちが人工皮革のスパイクを履くかという、プロ選手はそのメーカーの人に足のサイズに合わせてスパイクを作ってもらっているからです。でも逆にその選手の足の形のまま DUO リーグの選手が履いていくと、自分の足じゃないものを履いていくので、無理が生じるんです。それがぼくの中で違和感を覚えながら、絶対革の方がいいだろうというのがあり、この写真もそうですけど、こういうものを作ろうかなと思って集めた写真です。

そういう経緯で集めていた資料ですが、磨くことも、天然の皮革じゃないと靴クリームが乗りにくいんです。人工皮革の場合、汚れを落とすだけになってしまって、長持ちをさせることができないんです。革の方は栄養を与えることで、長持ちをさせることができます。革は生き物で、長持ちをさせるというところでも革の方がいいということになります。簡単に言うとそんなところです。

土谷：やっぱり一朗さんが、講座の前に革の話をみんなの前ですることがあるんです。(映像を見ながら) こういう感じで、今と同じような話を学生たちにもしながら、じゃあどういったクリームが靴

をよくしていくのか、あるいは意味のないクリームももちろんあって、そういったことも教えたりしています。その後、実際に靴を磨くという作業に入っていきます。

佐藤：革は本当に丁寧に扱えば長持ちします。実際に資料館とか博物館に行って、革のものって残っていたりしますよね。これって本当に革って長持ちがするからなんです。ただ、腐って土に帰るといってもあるので、腐りもするのです。

だから革を腐らせないために「なめす」という作業をします。なめすというのは、昔はあるときは、木に皮を干していたんですね。その木に干していたら、その木の樹液が皮に付いて変化しました。そしたら、皮がなぜか柔らかくなり、なぜか腐らなくなりました。

こういうことでなめすということが始まっただろうということですが、今も植物（ベジタブル）タンニンなめしというなめし方と、そしてクロムなめしという銀を使う2種類あります。靴をなぜ燃やせないかという原因はそこにあって、クロムなめしというのは、燃やすと有毒ガスを出すので、燃やせないというのがあります。でも、クロムなめしの方が、技術的には柔らかくて靴にはすごく適していて、馴染みというか伸びがいいんですよ。

植物なめしというのは反対に堅くなってしまいうんです。当時はたぶんそれが柔らかいと思っていたのですが、やはり技術が上がり、クロムなめしというのが一般的になりました。

中塚：クロムなめしのクロムというのは最初から入っているんですか。

佐藤：いや、なめすときに化合させるんですよ。腐らないように塩漬けされた生皮を、塩を落とすのに水で塩を落とし、アルカリ性である石灰水でまず油を取って、それから皮をクロムと化合させていきます。その後油分を与えてカピカピに硬くならないようにします。植物（ベジタブル）タンニンなめしの方も、植物タンニン（渋）の液にずっと漬けて、皮と化合していきます。もともと生きている素材なので、ああいうクリームというのは乳化性クリームといって、栄養分を与えると本当に新しいものによみがえるんですよ。肌のケアと一緒にです。

## 5. プロジェクトの実践：その2（ビデオ映像を見ながら）

土谷：磨いてきれいになって解体する過程で、靴ってこのようにできていたんだ、部品ってこんなにあるんだ、という声が自然と出てきますね。コマーシャライズされたスポーツの産業になっていすけど、底辺からもう一度文化を見るという時間とか場所とかきっかけというのは、DUO リーグとかそういう教育の現場に近いところでやっていった方がいいんじゃないかなと。靴を大切にすることとか、磨くことって日常的な心構えで、一環だと思いますし、プレー一つ一つの精度にも絶対につながってくると思いますね。絵の世界でも、画材が汚いやつは絵も下手なんですよ。毎日鉛筆を研いで、筆をきれいにすることって。そういえば筆も動物の毛なんで、使った後は本来シャンプーをしてリンスをするんですよ。そういうことをしっかり毎日やっている人は絵が上手なんです。

佐藤：やはり表面に汚れがあると、その上にクリームを乗せてしまうので、結局革の繊維に届いていないので、意味がないんです。だからああいう場合は、水洗いをしてもいいんです。革っていうのは汚れてしまっても、水洗いをしてはいけないかということそうではないんです。逆に水洗いを



してもしっかりケアをすると、戻るんです。それだけすごいんです。本当に生きている素材です。  
土谷：今度はばらす説明で、各部品の説明をしたり、例えばカウンターという名前の部品があるんですけど、なぜカウンターっていう名前なのかと説明します。

佐藤：外国ではカウンターと呼ばれていまして、日本では月型と呼ばれています。カウンターの名前の由来は外国でのパークカウンターがこのような形をしていたからです。月型と呼ぶのも同様にお月さまの様な形に見えるからです。名前もおもしろくていろいろと説明をしたりしています。靴の上の部分はアッパーって言って、下の部分をソールって説明をしている場面です。

このカウンターというのは、足を支えているすごく重要な場所で、踵を踏みつぶしてすかすかにしている選手もいると思いますが、あれっていうのは結局靴の大事な役割を捨てちゃっているということなんです。あれがあるからこそ、踵を支えていることによって、歩きの保護をしているんです。すごく考えられていて、堅いカウンターが入っているんです。それをいま解体してばらしているところですね（映像を見ながら）

土谷：それで、部品毎に分別してもらって、われわれが持ち帰って使えるものを分けます。すごく大量に集まってきますね。

中塚：これはどこの学校ですか。

佐藤：本郷高校と獨協高校が一緒にやっていました。雨が降ってすごく寒かったときです。

土谷：ああやってばらした靴で、オールドな雰囲気のスニーカーシューズで、50~60cmのトロフィーを作る予定です。

## 6. 余った部品の利用法

土谷：やはり革の部分は使うんですけど、ソールの部分、つまり靴底の部分が同じ数だけ余るので、一朗くんとソールの使い方に悩んでいたら、タイの方では、廃タイヤを使ったサンダルが街中で普通に売られたりしていますよね。この間イギリスのマラソンで走ったどこかの選手も、廃タイヤの靴で走ったというのを聞きましたけど、このソールを使ったサンダルというのに生まれ変わらしたらどうなんだろうと思って、今日急ぎで作ってもらいました。

（現物のソール・サンダルを見せる）

佐藤：このソールもちろぬ DUO の選手のソールです。上のアッパーも、アッパーの解体した部品を使って、ただぼろぼろなので素材を選んでいきます。試作品第 1 号です。ビーチサンダルみたいなサンダルを作ってみました。

この鼻緒っていう技術はとても優れている、昔から日本で使われている技術なんです。未来創造堂を見た方は分かると思うんですけど、ビーチサンダルを生み出したのは日本人なんです。鼻緒っていうのはサイズがあまり関係なく、それでいて足をちゃんと包んでくれている。これは素晴らしいとぼくは思っていたのを、土谷さんがサンダルにしたらいんじゃない、って簡単に言ったところから、このようなサンダルを作ってしまった。作ったときに履いてみたんですが、結構履き心地がよくて、こんな感じになります。

プレイヤーが主体的になる関わり方を探る。

< 次なるプロジェクト案 >

履き潰したシューズからサンダルを作り売る。

例) 廃タイヤのサンダル



フロア：かっこいいよ、それ。

土谷：かっこいいよ。しかもそれは一朗くんのコンセプトと合っていて、明治維新に靴が入ってきて、スパイクの使い方が分からなくて、結局サンダルにした感じですよ。

佐藤：一応選手が使っていた物なので、傷とか汚れてとか、そのまま残っているんですけど。

土谷：それがまたいいかもしれませんよね。これを考えるもう一つのきっかけとしては、DUOの会議に出ているクラブとグラウンドを持っていないクラブがあったり、学校のクラブではないところがあったりして、グラウンド費用が問題になっていたときがありました。これは部員としては自費負担でやっていくしかないということもあるのですが、アートとかデザインでどうにかならないかなという事で、自問自答していました。

そういうことも踏まえて、靴をばらした後にソールが大量に余ることに

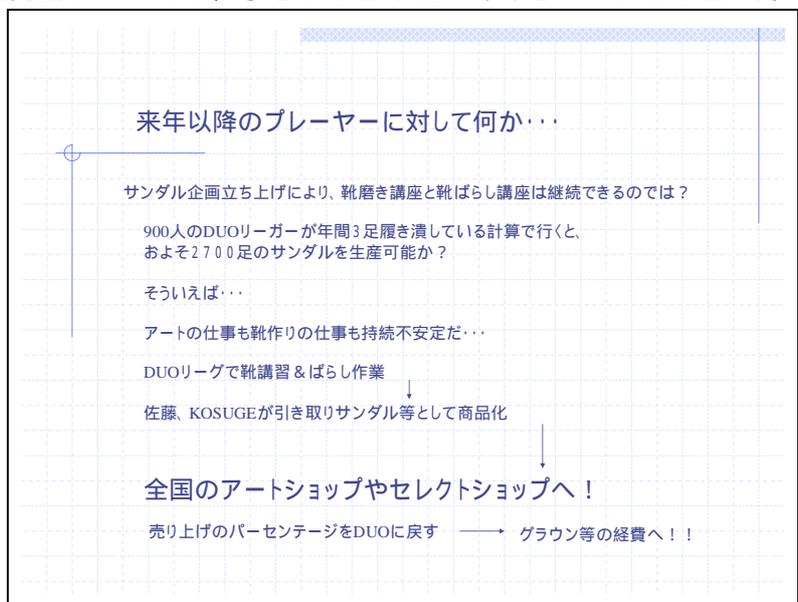
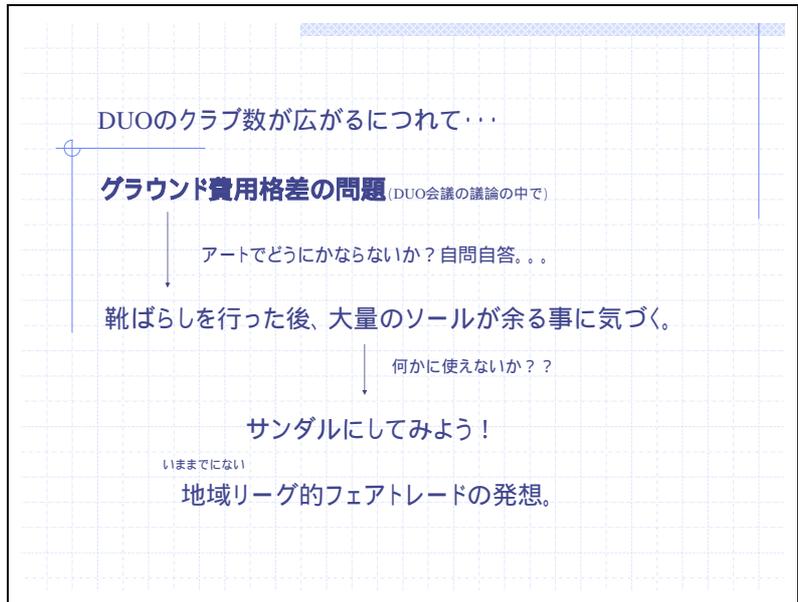
気づいたんですよ。だからサンダルにしてみようというような考えにいき着きました。それで、たぶんこんなのはイギリス人がよくやっているグローバルな中でのフェアトレードのようなことなんでしょうが、地域リーグ的なフェアトレードができるんじゃないかと思っていました。

そして、もう一つの軸は、靴磨き・靴ばらし講座を、来年トロフィーができあがって以降も持続できる根拠がほしいということがあって、ぼくらも不安定な仕事なので、そうそう持続的な仕事には恵まれないわけですよ。大きな展覧会があったり、小さなことで埋め尽くされていることの繰

り返しなんですけど、じゃあお互いこれはフェアトレードになるんじゃないかなと。DUOリーグで靴磨き・靴ばらし講習会をした後、佐藤と土谷が回収しますと。それを、例えば一朗くんは靴をモチーフにしたキーホルダーなど、あらゆるノベルティを作っています。

佐藤：(靴の形のキーホルダーを見せながら)これは靴の形をしたキーホルダーです。革も天然のものなので限られた場所しかつかえないんです。余ってしまったのをどうしたらいいのかなとなると、わたしもそればかりでは食べることはできないので、食べる方法はないかということで、キーホルダーを作ったりしています。たまに売っていたりもします。

土谷：余り物には福がある的な発想で、これをDUOリーグにそのまま活かして、今年から来年の春までそれなりに仕事があったりするので、そういう各地の美術館とかアートショップとかに置かし



てもらえるぞと。それに一朗くんのネットワークで、ファッション系のセレクトショップにプレゼンに行くことも可能なんです。DUO リーグというブランドで、サンダルと小さなノベルティを展開して、その売り上げの数パーセントを DUO にバックする。それでグラウンドの経費とか、DUO の事務局長の仕事は大変でしょうから、そういう人へのリスペクトで回していくということで、地域リーグ的なフェアトレードが可能なんじゃないかなと思っています。中塚さんには何度か言っただけですが、今日初めてプレゼンすることになって、来年以降のプレーヤーと一緒に、「履けるサンダルを作るプロジェクト」をスタートできる可能性がないでしょうか、というところで、今回の発表は終わりにしようかなと思います。

### 第3部 質疑応答・ディスカッション

中塚：第1部、第2部を通して、DUO とは何かから、このプロジェクトが一体どんなものなのか、今後の展望についてのアイデアも示してもらいました。あと 30 分くらいのディスカッションの間では、このプロジェクトを「今後どのように進めていくか」ということと、「その成果をどう広げていくか」ということを中心に議論を進めていきたいと思っています。せっかくいいことをやっているのだから、これを内輪にとどめておくのではなく、全国のサッカー人、スポーツに関わる人、あるいはアートに関わっている人たちになんとかうまく具合に広げていけないかと思っています。

というわけで、電通の方にお知恵をいただきたいなと思って、卒業生の保持さんにお声掛けして来てもらいました。質問も含め、まずは何かコメントをお願いします。

#### 1. 今後の展開と切り口を考える

保持：本当におもしろいと思います。トロフィーができる、もっと盛り上がるかなと思うので、形にさせていただきたいと思います。サンダルとかも、やはりグッズを見ると結構テンションが上がるじゃないですか。まず一つ閉じた形で、トロフィーを作る以外にも、いっぱい回収されたやつをどうしていくかというのもあるし、私がおもしろがってここに来たように、これ自体はいいなと思います。

それと、ぼくはサッカーじゃなくても通じるものがあると思います。革の靴を使って行うスポーツはたくさんありますし、高校生だけでももちろんないじゃないですか。あまりに大風呂敷ではないですが、この話のどこを切り離してどういうふうにするかっていうこと。ぼくは最初はトロフィーがキャッチーでよかったなというか、新しい考え方の、なんかこの精神みたいなものの、どこを切り出していくか、どう伝えていくかっていうことですよ。いろいろとやり方はあると思うので、核を決めて、その後段階を決めていくことが重要かと思っています。

とにかく、まずおもしろい話を聞かせていただいて、初期の DUO リーガーとしてはかなりショッキングなことです。私は年表でいうと最初の頃の選手で、こんなおおごとになっているんだっていうところにもすごいなあって思います。

中塚：どこを切り取るかということと言うと、ぼくも最初は漠然としたイメージだったものが、カレンダーになって、ロゴになって、靴磨き講習会になって…。最初は靴磨きだけだったけど、その次に靴ばらし講習もやることになりました。先々週の日曜日にうちの選手たちもばらし講習会までやったんですけど、やってみてわかったけど、当初トロフィーを作るっていうスポーティーなことからは始まっているんですが、実は環境問題でもあるんです。どこの学校の部室もそうだけど、とにかく大量のいらぬ靴が出てきて、それが燃えないゴミになって「夢の島」に埋められている。それが、解体することによって、使える部分が再生されるっていうところに、これはすごいなあって思っ

たのが一つです。

それから、生徒たちは、危ない手つきではあるけどカッターを使って、佐藤さんのアドバイスをもらいながらそれなりに皮を切り裂いてピースにしていく中で、「生きる力」も身につけていくなど。そういう意味では切り口はいろいろとあるなと思っています。

ただ、最初はトロフィーというところに特化していいのかなと思います。

土谷：サッカーシューズを解体したソールから作ったサンダルなんですけど、欲しいと言ってくれる人にどうすれば売れるのかと。ぼくらは売るとは素人ですからね。むしろ売れないものばかり作っていますからね。

高橋：単価にするといくらなんですか？

佐藤：実際のところプライスレス、値段はないのですが、ぼくが1人でやると値段が高くなって、2万円くらいかと。革をたくさん使っていますしね。

中塚：これは革靴ですからね（笑）

佐藤：だからそれくらいかかってしまいますね。それで、いろいろ集まったものの中で、劣化していないものを選んだんですが、一応リサイクルをするのにも、その辺はしっかりしていないと。

中塚：解体作業をする中で生徒が言っていたのは、こんなに部品があって大変だなんていうことです。

靴一足作るのに、いろんな人手と労力が関わっているのが、実感として分かるわけですよ。

土谷：筑波大附属の生徒さんに、この靴を作ったら幾らで売って聞いたら、「ぼく技術ないもん」とか言っていましたね。もし技術があるならどうって聞いても、いくら値段をつけたいかわからないと言っていましたね。

## 2. 靴磨き・ばらし講習会の様子

依藤：最終的にトロフィーは、DUOリーグアウォーズで授与されるんですか？

土谷：そうですね。

中塚：7月19日にありますね。

土谷：全クラブに行き渡るように、毎週駆け足で試合を追いかけて、ぼくが行けないときは一朗さんだけで行ってもらっています。ぼくは昨日、立教と小石川に行って回収してきました。

中塚：当初DUOリーグ会議でこういう話をして、各クラブの代表に「トロフィーがない！」プロジェクトをやるというと、当然ですけど何のことかわかってもらえないんです。あとはDUOリーグ通信で、いまこのような状況ですという情報を流して、いよいよ講習会だぞっていうことをやるんですけど、初めのうちは反応はあまりよくなかったです。だけど、いざやり始めてみると、この子らの顔（スライドをみて）を見てもらえれば分かると思うんですけど、生き生きと、本当に面白がっているんですよ。だから、関わってくるとそのおもしろさがわかってくれるのですが、関わっていないところはテンションが低いってというのが、まだ幾つかありますね。

土谷：まあ、形になるところまでは我慢かなと。形になった後にそこから話が始まるかもしれませんね。だから、7月のアウォーズまでは耐えるしかないですね。

保持：結構学生はノリノリでやる感じですか？

土谷：クラブによりますね。新入生も多いので、すでに仲がいいところは友達同士みたいな感じでやれるところもありますし。ガラの悪いところもありますね（笑）

佐藤：最初はやっぱりノリが悪いなって気づくんですけど、いざ靴を磨いている瞬間はすごく楽しんでやっています。

土谷：磨き終えたときに、「これを捨てちゃうの？」っていう声が上がりますね。そんなことを言い合っている間に、アイスブレイクが始まっちゃいますね。

佐藤：全然やる気がなかった子も、変わってきますね。

土谷：結局、自分が潰した靴なのに、刃が入れられずに持って帰る子もいます。

中塚：うちでもいましたね。弟にあげるって言って持って帰った子が。

佐藤：汚れただけで捨てていたってことなんですよ。

### 3．トロフィーの仕上がりにイメージ

高橋：トロフィーのできあがったときのイメージはどんな感じなんですか？

佐藤：ないんです。素材を活かして、ピースを活かしたいなと。そうすると、形は、集まってきたピースによって変わってくるので、そのイメージができないんですよ。このサンダルもデザインなしです。素材のピースを、いろんなところからパーツを選んで、その中で合っているものに目星を付けて、作り上げていったのがこれです。

塩谷：それがいいですよ、物を作るときに、無理矢理イメージを貼り付けるんじゃないで。

焼き物からこっちに移ってよかったんじゃないんですか。話をもらって作らない？って言われた方は、やっぱりどうしていいかわからないですよ。すごく自然に形ってできてくるんじゃないでしょうか。

牛木：トロフィーを幾つ作るんですか？

土谷：1つです。

牛木：どういうものができあがるんですか？

土谷：これを解体しますよね。革の部分をつなぎ合わせて、大きなシューズの、革の、シューズ型のトロフィーになります。

牛木：だから、スパイクシューズがたくさん必要だっていうことなの？

土谷：そうですね。できるかぎりリアルに各プレーヤーが履きつづいたシューズを使おうと思います。

だから、革をサンプリングして、トロフィーを作ろうと考えています。

佐藤：こういったものがたくさん出てきます。こういったピースを活かしてトロフィーにしようと考えています。ぼくが関わるので靴の形の方が、形のフォルムとしてはいいだろうと考えています。選手にとって、スパイクの形はわかりやすいっていうのもあるし。

土谷：靴ということで、地に足が付いた部分ではじめ、次にボールのトロフィーだったり、ユニフォームも絶対できると思うし、いろいろと展開できそうだなっていうのがあります。

### 4．トロフィーの位置づけと制作上の課題

中塚：ぼくが悩ましいのは、DUO リーガーにこのように講習をやってもらって革のピースを採集してトロフィーを作るんですけど、できあがるトロフィーが1つだけということです。いま、DUO リーグは2部があって1部があって、さらに隣のリバーサイドリーグと組んだ上位リーグ「Eリーグ」まであります。例えば筑波大附属はEリーグに属しています。もちろん靴講習会には参加していますが、いま作ろうとしているのはDUO リーグ1部優勝チームに与えられるトロフィーで、2部やEリーグでもらえるのはレプリカしかないんです。これがちょっと悩ましいところですね。

牛木：手間の問題もあるんだけど、材料はたくさんあるのだから、たくさん作ればいいんじゃないかと思ったんだけど。専門家じゃなければやっぱり作れないものですか？

保持：最後まで参加するのは難しいものですか？ ワークショップみたいに一緒になってつくることができないかなって思うんですが。

土谷：これは技術の問題ではなくて、たぶんDUO リーグに参加しているクラブの認識とかシステムの問題だと思いますね。時間をいつに設定するのとか。靴磨き・靴ばらし講座でも意識の行き届き方が違うので、1人しか参加しない学校もありますし。だから、まず1つシンボルができて、やっぱりおもしろいとか、そういった形で伝わらせていかなければ広がっていかないのかもしれないね。草の根リーグの中の草の根活動です。やっぱりワークショップの形で展開すると、学生たちとマンツーマンで話ができるし、彼らもいろんな疑問を持っていますから。何で磨くのか理解でき

ずに、監督に言われて嫌々来る子もいて、まずそういうところですね。そういうのがクリアできるならば、大量に幾つも作れると思うんです。

佐藤：技術的にはそんなに難しいことはないんですよ。本当に貼り付けていだけなので、誰でもできると思います。

中塚：どうやって貼り付けていくの？

佐藤：靴を作る時に実際に使用している特殊な接着剤がありまして、土台があって、そこに貼り付けていくということを考えています。

牛木：いまのサッカーシューズは、みんな天然皮革ですか？

佐藤：天然皮革ではないです。ほとんどケミカルです。ただ、それもいまの時代なので、そればかり避けて天然皮革だけになると、逆にそれだけでは部品が揃わないということがあります。ケミカル（人工皮革、合成皮革）も取り入れようっていうことです。長持ちさせるという意味でいうと、別にケミカルでも、汚れを落としておけば同じことなんです。天然皮革であろうが人工皮革であろうが同じです。そういうところを知って欲しいというのがあります。ものを大事にするっていうところが自分の中にあるって、伝えたいっていうのも含めてあります。

牛木：プーマのマークが入っていて、またリバイバルさせて売っても構わないんですか？

保持：同じ例ではないんですけど、ランドセルを小さいランドセルにしてとっておく業者があるんです。それは思い出としてとっておきたいというニーズがあるからです。だからぼくは、あれも草の根の延長でビジネスにしているわけだから、枠組みとしてこのやり口をノーと言うところはそんなにないと思います。

どういう位置づけにして、別にお金儲けをしようというわけではなく、持続可能なやり方にしていきたい。だから、それもやり方次第だと思うんです。このサンダルを、普通のサンダルを欲しい人が2万円では買わないが、これが、ボールがいいのかサンダルがいいのかはわかりませんが、思い入れがあるものとして、そこには同じ2万円ではないと思います。いずれにしても、いろいろと広がっていくだろうなと。どこから手をつけていけばいいのか、どこを育てていけばいいのか。

夢は広がるけどどこから手を付けましょうか…。

牛木：やっぱり本物ができあがってからですかね。

保持：求心力になりますからね。

## 5. いかに広めるか

中塚：そうすると、DUO リーグ・アウォーズをどこでやるかという話が1つありますね。何百人も来なくてもいいけど、少なくともDUO リーガーがいて、関係する人たちがいて、ちょこちょこ取材陣がいてというような状況でDUO リーグ・アウォーズをやって、はいトロフィーですって感じでできるといいかもしれないですね。

保持：これまでのままだと取材にくるかどうかはわかりませんが、少なくともこの取り組み自体をうまく入れ込んでいけば、興味を持つところはあるはずですよ。

中塚：事前の仕込み方には、何かありますか？

保持：どういうルートで行くかですけどね。一番単純にいくと、新聞社などや、パブリシティというか、うちの会社で言うと、事前にこういうネタがあるんだけどっていうところを伝えるところですね。いまだとネット関係でもネタをほしがっているところがあるので、そういうところはフットワークがいいので。それもどういう文脈でいくか。つまりスポーツ文脈でいくか、アートという文脈で興味を持ってくれるところもあると思います。それもいっぱいあるので、どこに狙いを持っていくかということです。

白井：アート側の子どもを巻き込むとかね。サッカーだけでなく、それを取材に来る子どもたちがいて、それを学校で流すとか。文化系の子たちが付き合えるような、下地になってくるようなこと

もできるはずです。確かにサッカーをやっている子がやる取り組みかもしれませんが、興味がある子ども全体を巻き込んで、そういう子たちが試合を見に来るとのことにつながっていければと思うのですが。

土谷：筑波大学の工芸の方からはどうですか。

塩谷：その経験をした子どもたちが楽しみですね。やっぱりスポーツと芸術がなかなかリンクしないのが現状なので、本当におもしろい試みだと思いますね。

土谷：DUO リーグってサッカーだけじゃないじゃないですか。構想段階ではバスケをやっていたりして、その中に美術部も入れて欲しいなっていうのがありますね。新聞部でもいいし、DUO リーグ自体が、社会的な機能があるっていうんですか。自分でプレスして、自分たちで作れるとか。事務を好きな子がいるかもしれないですし。

中塚：ちなみに DUO リーグの事務局長は、サロンの会計・名簿を担当してくれていた岸君がやってくれていましたけど、今度就職して北海道に行ってしまいました。それで次の事務局長をどうしようかってぼくも困っていたら、DUO リーグ会議に自分のクラブを代表してずっと出ていた、城西高校のマネージャーが、今春大学生になって、喜んでやってくれているんですよ。女子マネージャーも体育・スポーツ寄りではあるけど、それでもプレーヤーじゃない人がリーグ運営に関わっているんです。もっともっと企画を広げていきたいですね。

土谷：すごく正直な話を聞いてよかったです。

## 6 . サングルの価値と値段

佐藤：ちなみにこのサンダルを幾らくらいで買いたいですか？ 2万円という設定は、ぼくの作品だという付加価値を付けての値段なので、これが他の人が関わることによって値段はぐっと下がります。値段の設定はまた変わってくるので、逆に幾らくらいなら買うのかなっていう疑問があります。

牛木：買わないですね。ぼくは廃物を商品化するという発想ではなかなか経済的には成り立たないと思うんです。元の革の方が安かったりするんですよ。でもこれは、中塚さんがおっしゃったように、ちょっと堅く言えば教育的価値があるんです。これなら 200~300 円でしか買わないです。芸術作品を買うのであれば全く話は別なのですが、実用品として売るなら経済的にはとうてい無理で、ゴミが「夢の島」に埋められるのではなく、役に立つんだっていうキャンペーンとしてやらないと、ぼくら新聞社でも取り上げにくいですよ。

佐藤：ぼくが思っているのは、なぜアートにいくかっていうとそこにあって、商品化して儲けようっていうことではないんですよ。ただ、経緯ですね。ぼくがこの話に興味を持ったのは、経緯がすごくきれいだったからなんです。みんなが履いた思い出が、傷とか残って、それがサンダルでよみがえって。そんな素晴らしいことってないだろうってことで、ぼくはやりたいなって思いました。だから、商品にして自分が儲けようっていうわけではないんです。

牛木：あなたが儲けようっていうことではないのはわかりますが、単に壊して、そして仮に売れば数パーセントが DUO に入るっていう話がありましたが、それはあまり現実的な話ではないと思います。たとえ話としてはおもしろいんですけど。ただ、製品としてやるときに、底がブーマで、上がアンプロですから、それはどうかなって。例えばシューズメーカーが、年に 1 人 2~3 足のシューズがゴミになっているのを反省して、連合して応援すると。実際に乗ってくるかはわかりませんが。

保持：製品化自体というより、取り組みに興味を持って、それこそ人的な協力とかお金以外にもそういう協力があるかもしれません。彼らが学校の中に入るのはすごく難しいことなんです。だから彼らにとってもかなりメリットがあって、そういうところからも興味を持つところがあるはずですよ。それは単純に靴を作っているメーカーだけでなく、キリンとかサッカーという文脈でそこに入ってもらえることが嬉しいのだと思います。

だから、単純にサンダルを作って売れるかどうかという話ではないと思います。そういうところ

ではなく、共感できるところを詰めていけばいいんじゃないでしょうか。

白井：DUO リーグの運営費に寄付をして欲しいという切り口もあるんじゃないでしょうか。そのために寄付してくれたらこれを差上げますと。例えば 5,000 円から 8,000 円くらいの間だったら、DUO リーグの運営資金にいいのではないのでしょうか。売るっていうのではなくて、こういう感覚だったら扱えるかなと思いますね。

中塚：自分が履いていたサッカーシューズがサンダルになるのならいいけど、他の DUO リーガーが履いていたサッカーシューズがサンダルになったものに、どれだけ思い入れがあるかっていうこともありますね。

牛木：他に革の使い道っていうのはないんですか？ 何か品物にするアイデアは。

保持：ストラップとかありますね。サンダルとか、実用品でなくてもいいんですよ。

白井：遊び心に徹していくっていうのもおもしろいですよね。

土谷：やっぱり作るところまで学生にやってもらいたいですね。そこにサポートしてもらおうとかね。

佐藤：土谷さんとサンダルを作る話をしていたのも、DUO リーガーが来て、DUO リーガーと一緒に関わって、それをサンダルにするっていうところをできればいいよねって話をしていたんです。

土谷：なぜかうちのアトリエに DUO リーガーが入り浸っているような...って話ですよ（笑）。

牛木：このサンダルは、サッカーシューズ以外の材料は加わっていないんですか？

佐藤：やっぱり劣化しているので、劣化しないのを助ける新しい皮を使っています。

## おわりに

中塚：予定の時間が来てしまいました。とにかくプロジェクト自体、実働を開始して数週間というところでもあるので、ロゴができ、カレンダーができ、靴を磨いてばらしてピースができて、サンダルができてと、ものすごい勢いで進んでいます。先ほどもありましたけど、今年度だけではなく、来年以降も何とか続けていこうと思っています。これからまたここで取り上げられたらと思いますし、皆さんからアイデアをいただければと思いますので、今後ともよろしく願います。

土谷さん、佐藤さん、最後に何かありましたら願います。

土谷：やはり気になるのは未来のことで、それに対して皆さんからいろんなご意見をいただきまして、すごく良い機会だったと思います。ありがとうございました。今後とも「DUO リーグにトロフィーがない！」プロジェクトをよろしく願います。

佐藤：いろいろ聞けたので、いろいろと考えたいなと思います。ありがとうございました。

以上、議論は次の場所へ・・・。